

2020. 9. 6 (日) マタイ22:15~22

22:15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにしてイエスをことばの罠にかけようかと相談した。

22:16 彼らは自分の弟子たちを、ヘロデ党の者たちと一緒にイエスのもとに遣わして、こう言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。

22:17 ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか。」

22:18 イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち。

22:19 税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのもとに持って来た。

22:20 イエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像と銘ですか。」

22:21 彼らは「カエサルのです」と言った。そのときイエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

22:22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

<説教>

先週と同じ聖書箇所ですが、今日は改めて「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」というみことばを中心にして考え、学びます。

イエスに敵対するパリサイ人たちはいつもは反目しているヘロデ党の者たちと一緒にあってイエスをことばの罠にかけてイエスを葬り去ろうとしました。

ことばの罠として、「カエサルに税金を納めることは律法にかなっているか、いないか。」とイエスに質問しました。

イエスがどう答えようとも、イエスのことばじりをとらえて、イエスをローマ帝国の支配と権威に引き渡し、殺してしまおうと企んだのでした。

それはただの悪意・意地の悪さでしかなく、その意味で不真面目な“軽い”質問でした。

唯一真の神を信じる、神の民であるはずの自分たちユダヤ人がどうして異邦人で偶像崇拜者であるローマ皇帝（カエサル）に支配されることになっているのか、カエサルに税金など納めなければならないのか、というような問題は、本当は真面目に考えなければならないことのはずでした。

彼らは聖書に記されているアッシリヤ捕囚やバビロン捕囚の教訓から、自分たちユダヤ人の不信仰や墮落に思いを致すべきでした。

そして自分たちはアブラハムの子孫だ（から大丈夫）という誇り奢（おご）りを捨てて、素直にイエスの教えに聞き、イエスに従って、神に立ち返るべきでした。

しかし決してそうしようとはしませず、イエスを罠に陥れようと不真面目な中味のない問いを投げたのです。

そういう質問に対してはイエスも彼らに「税として納めるお金にはカエサルの名前が書いてあって、カエサルがこれは自分のものだと言っているぞ。ならばカエサルに返したら

よい。」と、皮肉とユーモアを込めてお答えになったのです。

しかしイエスはそれで終わりにはならず、続けて「**神のものは神に返しなさい。**」と言われました。

このことこそが肝心要（かんじんかなめ）、何よりも一番大事なことでした。

それはイエス・キリストを信じて、イエス・キリストによって、イエス・キリストに教えられて、自分が神のかたちとしてつくられた者だと知ることです。

自分自身の罪によって墮落し、破壊された「神のかたち」を、イエス・キリストにある「神のかたち」に生涯をかけて新しく造り変えていただくことです。

自分のからだもたましいも、生活も全生涯もすべて持っているものは神から与えられたものであり、それゆえ「神のもの」として神にお返し、お捧げし、神に従うことです。

自分を神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げる（ローマ 12:1）ことです。

そのようにして「神のものを神に返す」という考えが彼らにはありませんでした。

だからイエスは彼らに「神のものを神に返す」ようにお命じになり、お教えになったのです。

それは神のことを第一にする、神のことを第一に考えるということでもあります。

まず「神のものを神に返す」ことを第一に真面目に真剣に考え取り組みつつ、「カエサルのもをカエサルに返す」ことについても真面目に真剣に考え取り組まなければなりません。

イエスこそは「**神のものを神に返す**」ことを第一に真剣に誠実になさったお方ですが、「**カエサルのも**」「**カエサルに税金を納めること**」についても一番正しく知っておられ、一番真面目に真剣に考えておられたお方でした。

だから彼らの“心根”に対応して皮肉を込めてお答えになりましたが、同時に「そんなことはどうでもいいことだ、考える必要はない。関心を持つ必要もない。」とは言わず、ちゃんと「**カエサルのもはカエサルに返しなさい。**」と言われたのです。

「カエサルのもをカエサルに返す」ことは「神のもの（を神に返す）」ことに含まれるのです。

イエスは確かに「**カエサルのも**」つまりカエサルに属するものがあることを認めておられます。

それは、直接的にはここで問題とされたカエサルに納める「**税金**」のことです。

「**税金**」は本来（昔も今も）、人々の益—公共の福祉—のために必要な事に、必要に応じて使われるように法律によって定められるものです。

税金に限らず、その他カエサルが公共の福祉のために、愛と善を勧め悪を罰し抑制するために法律によって定め、人々に勧めまた命じることがあったわけですが、そういうものが「カエサルのも」です。

それはつまり“政治的”なこと“社会的”なことです。

そういう意味でカエサルとは自分が支配する人々に「益を与えるための、神のしもべ」（ローマ 13:4）なのです。

これが「特権的な（上に立つ）権威」「神の下に（神によって）立てられている」（ローマ 13:1）カエサルという存在です。

もう言うまでもなく「カエサル」とは国家権力のことです。

さて「神のしもべ」ならば神のみこころにかなうことを行うべきであり、神のみこころに反することはしてはならない者なのです。

しかしカエサルも罪ある人間ですから、そしてその与えられた権力が大きければ大きいだけその権力を誤って乱用する危険が大きいのです（と言うか必ずそうなるを見て間違いありません。事実そうでした）。

だから「神のものを神に返す」者—私たち—は「人に従うより、神に従うべきです。」（使徒 5:29）ということをお忘れではありません。

カエサルの命令・法律が神のみこころに反していない限りでカエサルに従うのです。

しかしもしそれが神のみこころに反していたら従ってはなりません。

むしろ従わないという姿勢を示し、「それは神のみこころに反している」と言い、「神のみこころはこうである」と反対に教えなければなりません。

「神のもの」のうちに「カエサルのもの」が含まれているということは、二つが同じように左右均等に並んでいて、どちらを取るかどちらが大事かという話しではありません。

「神のもの」の下に「カエサルのもの」があるのです。

そして同時に、「カエサルのもの」で「神のもの」の関心外・射程外のこともあり得ません。

神こそは天地万物の創造者であり、支配者であり、最終審判者であられるからです。

「主よ、偉大さ、力、輝き、栄光、威厳は、あなたのものです。天にあるものも地にあるものもすべて。主よ、王国もあなたのものです。あなたは、すべてのものの上に、かしらとしてあがめられるべき方です。」（I 歴代 29:11）とダビデは賛美しています。

ですから、「カエサルのもの」の中で—つまり“政治的”“社会的”な出来事について、またそれに関する考え・判断・行動の中で—私たち「神のもの」の信仰（の良心）と関係のないこと、無関心でいて良いことなど一つもありません。

少なくとも、関心を持ち、正しく知ること、正しい判断をすることを祈り求めなければなりません。

「税金」のことに話しを戻せば、「カエサルをカエサルに返し」たなら、さてカエサル（国家権力）がその税金を私利私欲（自分だけの利益と欲望）のためにではなく人々の益のために公共の福祉・利益のために正しく使うかまでに関心を持って見張らなければなりません（それが納税した者の権利でありまた義務、責任です）。

なお、国家権力が言うところの“公共”というのがよく見ると実は一般市民のことではなく国家権力自身のことだということがこの日本ではままたまあるようなので、よくよく気をつけなければなりません。

今や誰もが直面しているコロナウィルスの問題にしても、原子力発電所の問題にしても、いわゆる“森、加計、桜”問題にしても、沖縄を始めとするアメリカ軍基地問題、自衛隊基地問題にしても、アメリカからの兵器爆買い問題にしても、民族差別問題にしても、もちろんそこには人道的・倫理的問題が根底に拭いがたくありますが、それらは「税金」の使い方という目に見える形で表にはっきりと表されているわけです。

「神のもの」とされ、「神のものを神に返す」ことを知っている私たちキリスト者は「カエサルのもの」のことに真面目に真剣に関心を持つべきです。

そしてまたカエサルが“宗教的”権威として、または“宗教的”権威を盾（たて）に取

って振る舞うことにもよくよく注意しなければなりません。

当時の「**デナリ銀貨**」にはカエサルであったティベリウスの「**肖像と銘**」が刻まれていました。

表には「神聖なるアウグストゥスの子。ティベリウス・カエサル・アウグストゥス」という文字と横顔が、裏には「大祭司」という文字と母（リヴィア）が椅子（神々の座？）に腰掛けている像が刻まれていました。

当時は後の時代（黙示録が書かれた時代以降）ほどは皇帝崇拝が強要されていたわけではなかったようです。

しかし、すでにカエサルは貨幣を通して、自分が神聖なる者、王の中の王、祭司の中の祭司であると言って、自分が神に等しい権威・権力を持っていると主張していたのです。

そのことを明らかに、再確認したうえでイエスは「**カエサルのものはカエサルに**」、「**神のものは神に**」と言って、「**カエサル**」と「**神**」をはっきりと区別なされたのです。

つまり「カエサル」は「カエサル」でしかない。決して「神」ではない。「神」は「神」として別に居られるとはっきりと宣言なされたのです。

皇帝であろうとその母であろうと人間を神とする（呼ぶ）ことを断固として否定なされたのです。

目に見えるところ、その主張するところ、誰も太刀打ちできないほど強大な権力・権威・武力を持っていたカエサルでした。

しかしその支配は神の前では、神の下にあるものであり、決して絶対でも無限でもない、限界があり、相対的なものにすぎないとイエスは宣言なされたのです。

国家権力（者）が一人一人の人間を人間として扱わない、国家権力（者）の私利私欲のために人間を利用するその一方で、一人の人間を神聖とし、絶対とし、独裁者とし、“現人神（あらひとがみ）”として礼拝と服従を求めて来る、国家を“神国”とする。

当時のローマ帝国がそういうことになったのですし、私たちの身近で言えば、大日本帝国だった時の日本がそうであり、また今の日本も本質は変わらずそんな国家権力（者）が幅を利かせていると言うほかありません。

そんな中で「カエサル（のもの）」と「神（のもの）」を信仰（の良心と知恵と判断力、知性と理性）をもって見分け区別していくこと、人間にすぎない「カエサル」を神聖化・絶対化しないこと、「カエサル」の遙か上におられ、本当に礼拝され賛美されるべき唯一のお方、真の神、イエス・キリストがおられることを私たちが全力をもって命をかけてこの世で告白し、言葉と行いで証ししていくことが大事です。

それが「神のものを神に返す」ことです。

カエサルは「俺のものを俺に返せ」と要求はしますが、「神のものは神に返せ」とは言わないのです。

むしろ「神のものも俺のものだ」と言うのです。

そうやってカエサルが「神のもの」にまで、私たちの信仰、人格に関わることにまで口を出し、手を突っ込んで来るのです。

神社参拝は国民の儀礼、義務であり、クリスチャンが言う偶像礼拝ではないと言って、それを強制するのです（かつての大日本帝国ように、また現代の日の丸・君が代強制のようにして）。

それはカエサルが真の「神」を知らないからです。

そんなカエサル・国家権力（者）に対して、その上にただお一人の真の神、天地万物の創造者、支配者、国家権力（者）をも裁く審判者、礼拝され賛美されるべき唯一の神がおられること、故に国家権力（者）は絶対化してはならないこと、国家権力（者）も神に従うべきことを正しくはっきりと宣告して教えること（宣教）が、神によってその時代に置かれ生かされている私たちキリスト者と教会の神に対する奉仕であり、同時に国家権力（者）に対する最大の奉仕なのです。

かつて一戦前・戦中一それができなかった、それをしなかったというのが、私たち日本のキリスト者と教会の歴史的事実です。

そしてその霊的な負の遺産（精神や雰囲気）を私たち自身も否が応でも受け継いでいるのですから、私たちは大いに反省し、悔い改め、常に目を覚まし、再び同じ罪を犯すことのないように、今度は「神のものを神に返す」ように国家権力に対してはっきりと言い、偶像礼拝を拒否できるように、神のみことばを学び、歴史を学んで、あらゆる手立てを講じ、全力で務めなければなりません。

イエス・キリストは私たちのために「神のものを神に返す」闘いを、十字架と復活によって闘い勝利してくださいました。

イエス・キリストによって私たちは神のものとして神のもとに立ち返る者とされました。

そのことを正しく知り、真剣に真面目に受け止めるなら、私たちは同じ罪を犯すことのないように祈り、務めるほかありません。